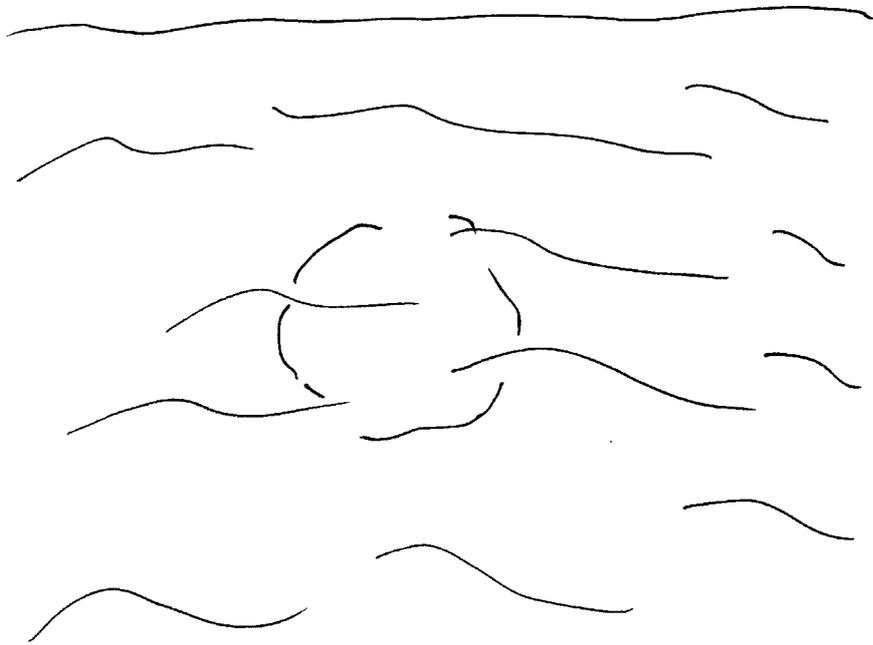
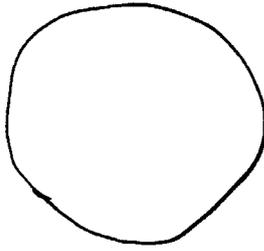
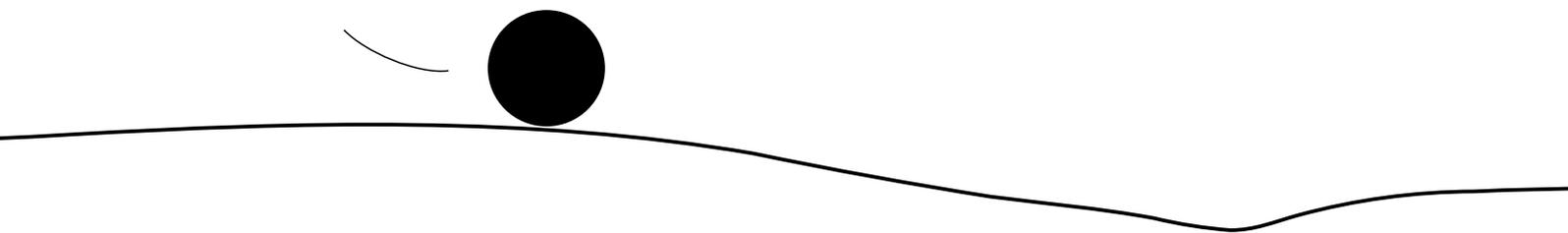


週刊

たまたま、





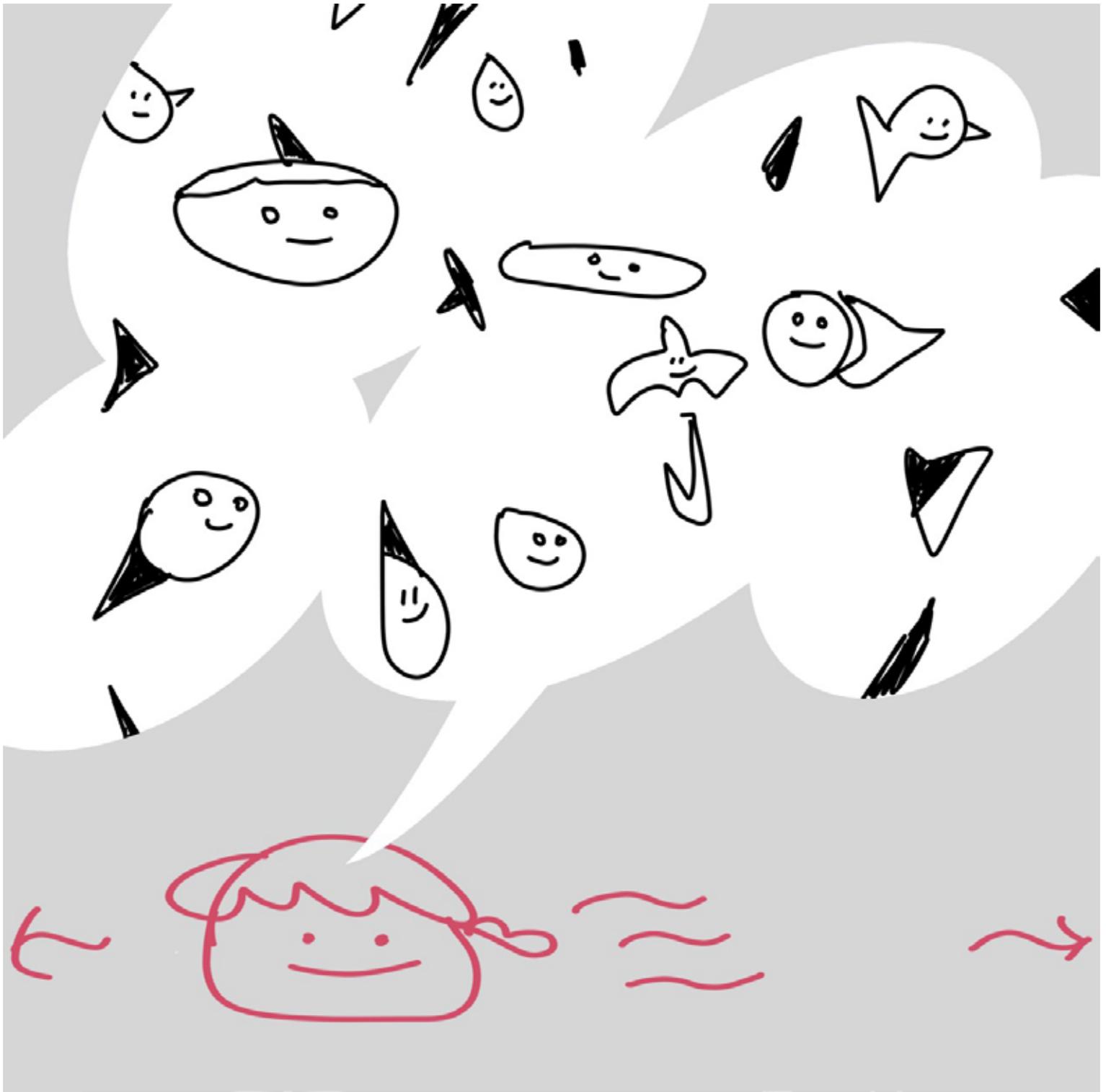
6 「ぶらぶら」



を使ってくるので、イライラした。水筒の中に特殊なお茶を入れている。ぶらぶらと三人で帰っていたけれど、不思議な組み合わせだ、たと思おう。僕だけは大した理由もなしに帰宅をしていたし、解散はともスムーズだった。あの三年間のおかげで、今も僕は帰宅するよこがすきだ。高見さんも下宮くんも、うらぶらぶらで何をしているか分からないけれど、帰宅は続けているはずだ。

今もブラブラ帰る話　　ひだかもと

僕は中学生のとき、帰宅部だった。帰宅部仲間
にべしエ教室のたぬに帰宅部だった高見さんが
いた。高見さんはベトナムもや、こいたし、僕の家のど
くのピアノ教室にも通った。すすい品のすすい人
だ、た、もう一人下宮くんは勉強のための帰
宅部だった。すすい身長がデカくて、一緒に
しこりこりさせると中がぼぼはあんなにまじりまじり







運動不足解消と薄着になって自分の体が気になってきたために、ストレッチや筋トレをはじめた。

これまで筋トレの必要性があまりわからなくて、やろうと思ったことがなかったのだけど、こうも家に引きこもって同じ姿勢で居続けると、「筋トレ」が頭にちらついてくる。動き方を検索し、こんな動きがあるのねと知るだけで満足する積読ならぬ積動（つんうご）からわたしの筋トレは始まる。

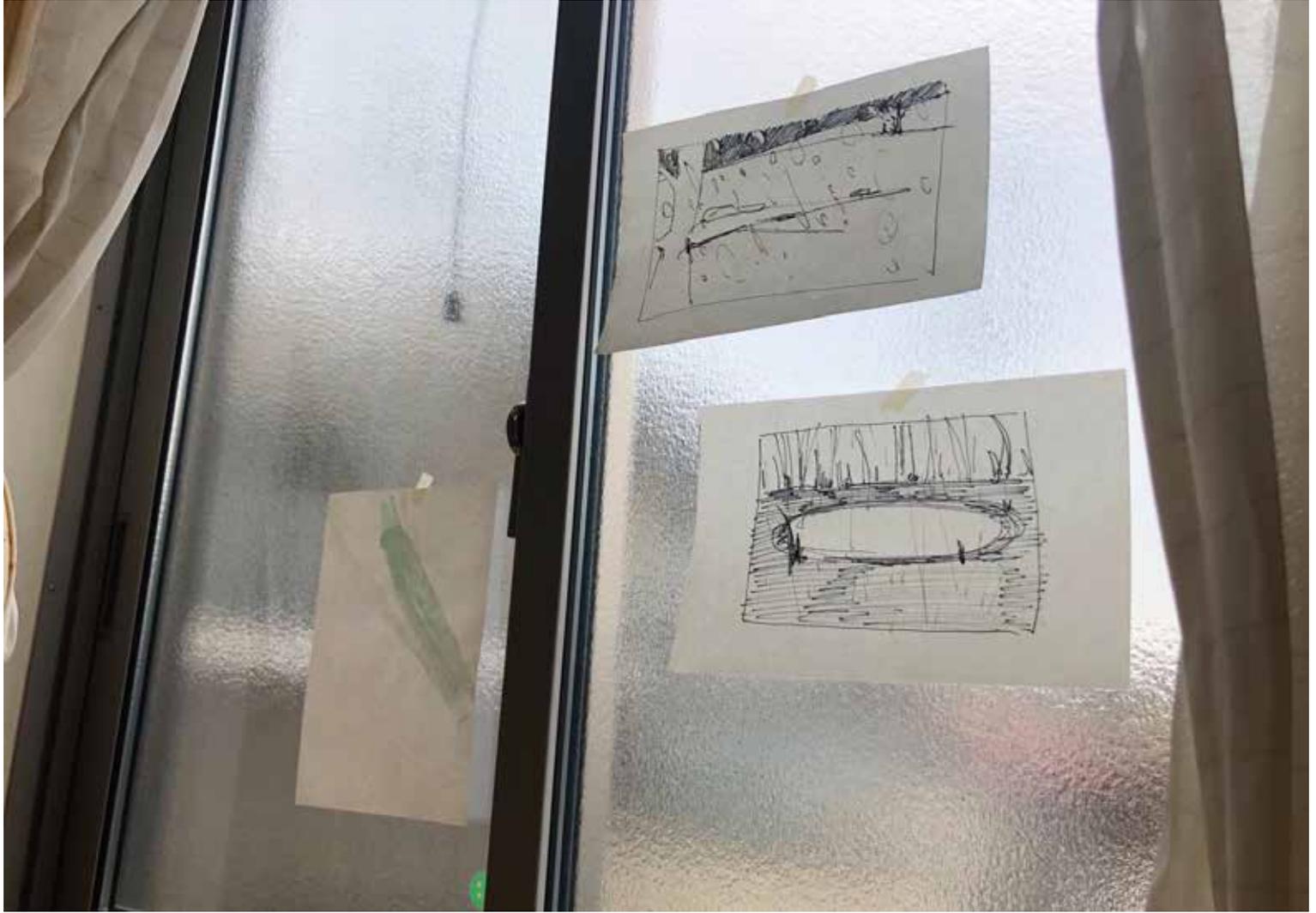
わたしはダンサーではないのだが、ダンスを見るのが好きだ。踊るのも好きだけど、ダンサーとは名乗り難い。踊れる体を作るために体を鍛えるのは間違いで、踊るうちにつく筋肉のなかで体の輪郭も踊りの形も決めていけばいい。（そういう踊りにこそ興味がある。）体づくりのための筋トレにあまり興味が向かなかつたのは練習嫌いのためかもしれない。アスリートであれば競技のための体づくりのための筋トレであるが、わたしの場合は何の目的もなく「身体のために→身体を動かすことが→身体のためになる」というように、筋トレは閉じた円環の中にある。筋トレは何のためでもなく、筋トレは筋トレのためにある。これは練習にはあたらない。やってもいいかと思える。でもなにか気が進まない。

「内向き」な運動である筋トレに対して、サッカーやバスケットの中の、「フェイント」は外向きな気がする。明確な相手にむけた振る舞いが込められている。そういえばテニスは振る舞いのスポーツだと言われている。わたしはテニスをしたことはないが、試合を見ると相手の振る舞いを引き出すために自分の身体を使っているように見える。これも外向き。のような気がする。動かした体に別の目的が連なっている。

かなり脱線した。コロナ以前、行動を選択するときには自分を含めた複合的な要素に巻き込まれエコーするようにして生活してきたのを、家の中ではほとんどすべてのことを自分で決定して動かないとなにも動かない。エコーしたい。同居人はわたしのそんな魂胆に気が付いて、わたしに悟られないように散歩へ行ったり買い物をしたりしている。わたしはいつも切り替えられないで考えごとと昼寝をやめられない。時間割を決めて動かないといけないのが辛いけれどそうしないとなにもできなくなってしまっているので自分に鞭打ってエクセルを叩く（わたしは自分のタスク管理をエクセルでやっている。）。

自分で数を数えて上下運動しないといけないような筋トレをあまりする気にならないのは、普段の生活のタスクの多さに嫌気がさしているからだろうか。そんな中で手足をブラブラさせる筋トレは、寝っ転がって手足をあげていれば成立する受動的な運動で、わたしにはこれが心地よいのだ。重力と身体のやりとりに対して、わたしはうまくブラブラできているかだけ気にしていればそれでいいのだから。









僕が電話した相手

僕は実家から一人暮らしの家へ帰るまでのいろいろを考えていた。
何を持って行って、何を置いていくかを。

考えている間、みそ汁のお椀に卵を一つと、牛乳を垂らしてかき混ぜ、パンにひたした。その日の気分で、牛乳を多く入れてしまうこともある。弱火で2,3分ほっておいてひっくり返す。出来上がったハニートーストにハチミツを数滴垂らして、マグカップに牛乳を注いだ。

ぼんやりとした明度の低い雲と紫の長袖のTシャツを着た。あたりはいつものように小鳥が泣き、二階の窓辺に置いてある貝殻の吊るし飾りが擦れ合う音がする。まるで風としゃべってるみたいに。トンちゃんは声を響かせ、孤独に何かをうたえていた。

その電話が鳴ったのは、13時を回る前だった。僕は、午後の1時に電話をかける奴の気がしれないし、何よりもフレンチトーストを食べようとしていたものだから、鳴らさばなしにした。その電話は8回ベルを鳴らした後切れた。実家の電話だから、僕への電話ではないだろうとも思った。

フレンチトーストを2切れ食べた後またベルが鳴った。僕は数えて3回目のベルで受話器をとった。「はい」と僕が言うと、何も返事はなかった。その上、その受話器の先には完璧なまでの無音が孕んでいた。鳥の声も、貝殻の擦れ合う音もしなかった。僕の言葉が底へ向かう少しの間後、受話器を戻す音がして切れた。

行き場のない僕の「はい」はその後、僕の脳裏に返ってきた。その声は死人のように低かった。

テーブルに戻って、牛乳を飲んだ。冷たい甘さがまだ残っていた。まだ冷えていたのだ。冷たい牛乳ってなんでこんなうまいんだって思ったのもつかの間、また受話器が鳴った。僕は7回目に出ることにして、数え始めた。

1.2.3.4.5.6...

僕が出るのと同時に相手は切れた。またそれと同時に何かが僕の中で確実に切れた。僕の中にあったそれはピアノの弦のようなものではなく、ニュートラルグレーの垂れている糸だった。ハサミで切られたわけでもなく、老化で切れたわけでもなかった。ただ、切れたのだ。黒ねこが去るみたいにね。

スダタカヤ



タイトル 週刊 たまたま、# 6 「ぶらぶら」

参加者 ひだかもと、鈴木玲美、うらあやか、近藤亜美、下山健太郎、スタタカヤ

発行日 2020/5/26

発行 東京造形大学 CS-lab

〒192-0992 東京都八王子市宇津貫町1556

編集 下山健太郎

